

平成23年度 人間発達文化学類 私費外国人留学生入試問題

専攻名	文化探究専攻(言語学、文学)	科目名	小論文
-----	----------------	-----	-----

以下の文章を読み、設問に答えなさい。

「人称」という言葉は、やさしそうに理解するのにむずかしい言葉である。

正式には「人称代名詞」と言うのだが、要するに、話しかける自分や相手の「代理」の呼びかたを「人称」と言ってきた。つまり平たく言えば、人間が人間を呼ぶときの呼びかたが「人称」なのである。これだけの説明なら、わかりやすいし、むずかしいということがあるだろうか、思われるかもしれない。たしかに人称が、中学の英語の文法のレベルで教わる事柄であるのなら、話は簡単である。しかし、人称の問題というのは、それだけのことを指すものではないから（とくに日本語では）事はやっかいなのである。

まず「人称」といっても、たくさんあるということから理解をしなければならぬ。日本語に人称がいくつもあることは周知のことだが、その数たるやものすごい。古くからの「一人称」を教えていけば五十一とか、「二人称」は八十一もあったというのを聞くと、誰もがびっくりするのではないか。

なぜ、そんなにもたくさんの人称が使われてきたのか。実際のところ多くの人称は、古い時代に使われていたもので、いまでは使われなくなっているものが多い。そんな人称のなかで、比較的公の場で使われる頻度の高いものだけを「人称」として学校の教科書でも紹介し教えてきているのである。

(中略)

三輪正は先行する辻村敏樹の研究などを受けながら、日本語の抱える多様で複雑な人称の発達をできるだけわかりやすく理解し整理しようと努めている。

なかでも三輪の研究の特徴は、そうした日本語の人称の研究史を踏まえて、それを外国語の人称のありかたと精力的に比較しようとしているところにある。インド・ヨーロッパ系の言語（英語、ドイツ語、フランス語、スペイン語、サンスクリットなど）との人称の比較は、とりわけ興味深い。

比較研究を通して彼は、インド・ヨーロッパ系の言語（彼はそこに中国の漢語なども含めているが）の「一人称」や「二人称」が、わずか一個や二個であるのに比べて、日本語の「一人称」や「二人称」があまりにも多いというこの現実をどう見たらいいのかと疑問を投げかけている。ただ数が多いというだけでなく、見てきたように、「一人称」が「二人称」に、「二人称」が「一人称」に転用されてきた経過があまりにも著しいのである。

もともと「一人称」として、自分のことを指していた「な」とか「わ」とか「み」とか「われ」というような人称が、いつの間にか「二人称」に転用され使われていったという歴史がある。その逆に、二人称として使っていたものが、いつの間にか一人称として使われてきたという経過も存在する。

たとえば関西では、自分のことは「じぶん」と言うのだが、相手のことを言うときもしばしば「じぶんの言ってることはおかしいやんか」と言ったりする。相手のことを「じぶん」と呼ぶのは奇妙な感じがするが、関西の人は別に変だとは思っていない。

そんな特異な人称群をもった言語が他にあるだろうか三輪は考える。そしてそこから彼は、日本人の「人称の不安定さ」を見て取り、そこに日本の文化、とりわけ「自己の確立」の不安定さの基盤を見て取ろうとしている。

たとえば、テレビのトーク番組でそれまでは「ぼくは」とか「わたしは」と言って控えめにしゃべっていた人が、自分の主張を認められ出すと急に「おれが」と言ったりしてびっくりすることがある。話し相手が年下とか後輩であることがわかったりしたとたんに、「おれが」と言ったりするような人に出会うときもある。

その人が「ぼくは」や「わたしは」と言っているときは、ふつうの感じの人のように見えているのに、「おれが」と言い出したとたんに、まわりの人たちのその人を見る目が違ってしまふことがある。急に強者に見えたり、乱暴者に見えたり、粗野に見えたり、下品に見えたりするからだ。本人も、「ぼくは」や「わたしは」と言って発言しているときには、遠慮がちに、控えめにしゃべっているのに、「おれが」と言い出したとたんに、えらく雄弁に、高飛車に自己主張しはじめたりすることがでてくる。

公の場では、相手との関係の見積りかたによって、自分の呼びかたを変えなくてはいけなくなる。とくに会社などでは、自分の呼びかた、相手の呼びかたに気をつけなければならない。上司や目上の人に、まちがっても「きみ」などと言ってはいけないし、自分のことを「おれ」などと言ってはいけない。会社では、上司に対しては対等な意識を感じさせる人称は使わずに、自分が下であることが

平成23年度 人間発達文化学類 私費外国人留学生入試問題

専攻名	文化探究専攻(言語学・文学)	科目名	小論文
-----	----------------	-----	-----

わかるような言葉づかいをし、逆に部下には自分が上司であることをわからせる人称の使いかたを絶えず心がけていないといけない。

日本語の「人称」は、つねに上下関係を反映してしまうものになっているので、どの場面でどの人称を使えばいいのか、日本人はふだんの暮らしのなかでも、絶えずたいへんな気を配っているのである。「下の者」に対しては「偉そうな言葉づかい」をしなくてはいけ
ないし、「上の者」には「偉そうにならない言葉づかい」をしなくてはならない。

三輪正は、そんなことに神経を使っている文化は日本以外にないのではないかと、うんざりするような気持ちで論じている。相手との関係を見計らって、自分の呼びかたを変えたり、また相手の立場や身分や階層を意識して、相手の呼びかたを変えたりするような日本語の人称のありかたはよくないと考えているのである。

(村瀬学『「あなた」の哲学』より 出題にあたり一部を改変)

問1 下線部「うんざりするような気持ち」について、本文に即して200字以内の日本語で説明しなさい。

問2 本文の内容をふまえ、あなたの母語と比較しながら、日本語の人称について考えるところを1,000字以内の日本語で論じなさい。